

から支えるため「生活圏」「不介入広域」などの学説を唱道して、日本の外交に直接影響を与えた。

同じ時点から英語圏では、日本の宣伝を媒介に「東アジア」＝「東亜」が流行するようになり、戦後この傾向がなお強まったが、ベトナム戦争の時点から「東アジア」＝「極東」の意味を捨てて、「東南アジア」という地域の独立を最終的に認め、「小東アジア」＝現代日本語の「東アジア」に展開した。

#### ○平成十三年度卒業論文要旨

##### 〈日本史学専修〉

##### 中世前期の六浦

―鎌倉との関係と交通の変遷について―

加藤 裕美子

中世の六浦の交通に関する研究は、一九

彙報

八五年の上行寺東遺跡保存問題以後、時期を同じくして活発化した中世東国水運の研究とも重なり、港湾としての六浦のあり方についての研究が盛んに行われた。そこでは鎌倉・室町期の六浦が鎌倉の外港として、東京湾交通や太平洋交通、さらには鎌倉・大陸間交通の要衝であったことや、軍事的にも重要であったことが指摘されている。また十五世紀半ばには、政治的・地理的変動によって、江戸湾内の有力な港としての地位を失ったことなどが明らかになっている。このように六浦が鎌倉との関係で極めて重要な役割を果たしたことが明確になった反面、六浦・鎌倉間の交通の変遷と契機については、なお課題が残されていると考える。そこで本論では鎌倉期を中心として、六浦及び六浦・鎌倉間の交通の整備のあり方とその変遷について考察した。

鎌倉期の六浦・鎌倉間の交通路のあり方を考察する前提として、まず平安末期から鎌倉初期にかけての六浦の交通について、先行研究に学びつつ考えた。

鎌倉幕府成立以前、鎌倉には二本の東西道路と三本の南北道路があり、このうち北の山際を走る東西道路は当時、鎌倉の主要道であったことが指摘されている。この道沿いには杉本寺や荏柄神社、義朝邸（現寿福寺）といった鎌倉以前からの由緒を持つ寺社などが集中し、鎌倉初期には鶴岡八幡宮、大倉幕府が置かれており、東は六浦に通じていたと考えられている。この見解は平安末期から六浦を支配していた和田義盛の一族が、六浦と鎌倉を繋ぐ線上（朝比奈・杉本）に配置されていたことから裏付けられる。また『新編武蔵風土記稿』には朝比奈の切通ができる以前の道として二つの道が紹介されており、さらに鎌倉幕府が成立すると、六浦では鎌倉の境界の地として七瀬の祓や四角四境祭などの行事が行われている。特に寛喜二年（一二三〇）、將軍・頼経が三浦郡三崎で遊覧を行った際には「自六浦津、召御船」て三崎に向かっており（『吾妻鏡』（以下『吾』）寛喜二年三月十九日条）、鎌倉から船で出発する起

点が六浦であったことがわかる。

以上のことを合わせて考えると、平安末期には、六浦と鎌倉との間はかなり整備された道が存在していたということがいえる。具体的には前述の『新編武蔵風土記稿』記載の道や、釜利谷へ抜ける白山道といった道が存在していたと考えられる。

次に、鎌倉幕府成立後の六浦・鎌倉間の交通路のあり方を、社会状況などとの関係から検討した。

六浦・鎌倉間の道として有名な朝比奈切通は、仁治二年（一二四一）に開削されている。『吾妻鏡』では「六浦道」と表現されるこの道の目的を考える上で重要なのが、直前の仁治元年に開削された山内道路の存在である。『吾妻鏡』に見える両者の記事を比較してみると、朝比奈切通が「被配分御家人等」（『吾』仁治元年十一月三十日条）、山内道路が「為前武州御沙汰」（『吾』同十月十九日条）とあるように、前者は御家人役で、後者は前武州すなわち当時の執権であり山内荘の領主でもある北

条泰時自身の事業としてつくられていることがわかる。このような違いはあるものの、共に鎌倉北部から鎌倉の北へと抜け、また鎌倉を間に挟んで一つにつながるこの二本の道が、ほぼ同時につくられたということに注目したい。ここで共通項である鎌倉の北へ目を向けてみると、同じく仁治二年十月に武蔵野の開発が決定されている。

この武蔵野開発で注目したいのは、泰時が「雖似私沙汰、耕作之後者、為御所御計、可賜人々、然者可為御所御沙汰」（『吾』仁治二年十月二十二日条）と述べていることである。当時北条氏が国務を行っていた武蔵国の開発であるため、泰時の私費での開発が取り沙汰されていたが、開発後はその土地を御家人たちに給与することになったため、幕府全体の事業となったのである。この武蔵野開発と先の六浦・山内の道の開削は、北条氏と幕府双方の出費によって同時に行われた事業であるという点で、極めてよく似ている。さらに前述のように六浦・山内道路は鎌倉の北方、すなわち武

蔵に向かう道であることを合わせて考えると、武蔵野の開発と六浦・山内の道路の開削は、北条氏と幕府とが一体となって進めた一連の事業であったと考えられるのである。

この武蔵方面への一連の事業の背景の一つとして、寛喜二年（一二三〇）に始まった寛喜の飢饉を挙げることができる。私領や人身売買などに関する幕府法から、飢饉状態を脱するまでに約十年の歳月を費やしたことがわかる。また、飢饉状態中の嘉禎四年（一二三八）には將軍・頼経が上洛しており、先行研究によってこの上洛が御家人や幕府に多くの出費を迫り、大きな負担となっていたことが指摘されている。このような状況を踏まえると、武蔵野開発は飢饉や將軍上洛によって進行した御家人の窮乏を和らげ、幕府の収入の回復を図るために行われたと考えることができる。関東知行国である武蔵国の年貢は山内道路や六浦津・朝比奈切通を経由して鎌倉に入ることになり、二つの道の開削は開発に伴う物資

や人の移動だけでなく、年貢の通り道を確保する意味もあったと考えられる。

以上のことから、山内道路・朝比奈切通・武蔵野開発は、泰時を中心とした北条氏と鎌倉幕府とが一体となった、飢饉後の一連の処理政策であり、朝比奈切通開削には、こうした幕府主導の政策の一つであったという位置付けを与えたい。

次に、朝比奈切通開削後となる鎌倉後期の六浦と六浦道の維持・整備について検討した。

朝比奈切通開削後の六浦道については、建長二年（一二五〇）に山内道路と共に修築したという『吾妻鏡』の記事が唯一の史料であるが、前述のように御家人役でつくられた道であることから、鎌倉の内としてその後も幕府によって管理・維持された可能性が高い。

道の先である六浦津の管理については、六浦の領主である金沢氏の六浦との関わり方から考察を行った。六浦が金沢氏の所領になった時期は不明であるが、『吾妻鏡』

宝治合戦の記事から、この頃（宝治元年）までには金沢氏が支配するようになっていたようである。当時の六浦荘の中心は瀬戸神社から朝比奈切通にかけての六浦郷一帯であったが、金沢実時は一二五〇年代末には、当時辺鄙の地であった金沢郷に、称名寺の前身と思われる堂廊を付設した居館を建て、次いで称名寺を建立した。さらに文永十年（一二七三）には瀬戸内海に殺生禁断令を出している。この居館・寺院・近辺の殺生禁断という三点については、紀伊国保田荘に類似した事例があり、この三点が領主の文化的優位、一円排他的支配、交通・流通の掌握を可能にしたことが高橋修氏によって指摘されているが、金沢でも同様のことが言えるであろう。特に先の殺生禁断令に「下知状令書進候」（『金沢文庫古文書』五二一〇）とあるように、この地域の殺生禁断を幕府ではなく金沢氏自身が命じていることから、金沢氏が居館と一体となった称名寺とその周辺の瀬戸内海を掌握したということが言える。石井進氏によ

る武士団の所領支配の中核として武士の居館が存在したという指摘を踏まえると、六浦荘の中で港の一部でもある瀬戸内海は、金沢氏の居館と称名寺という金沢氏の六浦支配の中核部分に取り込まれており、この居館・称名寺・殺生禁断令という三点がそうすることによって、金沢氏は六浦津に強力な支配を及ぼしたのである。

金沢氏の居館周辺の整備は、正嘉二年（一二五八）頃から本格化するが、まもなく領内の交通整備も始まったと考えられる。文永十年（一二七三）以前に瀬戸堤が構築、嘉元三年（一一三五）頃瀬戸橋が完成し、さらに正和二年（一一三三）までには六浦関が設置された。瀬戸橋の架橋については、幕府中枢からの強い圧力の存在が指摘されている。この見解自体は否定できないが、六浦津が金沢氏の六浦荘支配の中核に位置している以上、やはり金沢氏の主導によって六浦の整備が進められていたと考えられるのである。

鎌倉内外の境界には北条一門が配置さ

れ、各々がその付近を支配地としていたという石井進氏の指摘や、得宗専制と言われる時期においても北条一門が独自に展開していたという秋山哲雄氏の指摘を踏まえると、鎌倉という地域の中においても、一門が各々の本領・居館を中心として独自の支配をしており、それらの北条一門の支配が一体となって、鎌倉全体を支配していたと言えるのではないだろうか。六浦に換言すれば、鎌倉後期、六浦道は幕府、入口である六浦は金沢氏という分担をしつつも、一体として六浦・鎌倉間の交通を管理するという形をとっていたと考えられるのである。

以上の考察をごく簡単にまとめると以下のようになる。鎌倉中期、北条氏と幕府が一体となり、六浦・鎌倉間に飢饉後の処理政策の一部として朝比奈切通が開削された。そして鎌倉後期には金沢氏主導のもと、金沢氏の支配の中核である金沢地域を中心に、堤や橋などの交通整備が行われた。本論では六浦の交通整備について考察し

たが、その変遷は鎌倉とその周辺の地域との関係を考える上で一つの類例となり得ると考える。また、鎌倉後期の六浦の交通整備に対する幕府・金沢氏の関わり方から、金沢氏を一つの事例として、得宗と北条一門との関係や、一門の独自性と一族の一体化といった問題を解く手がかりになるのではないだろうか。

#### 〈東洋史学専修〉

#### 外モンゴル自治政府の再興と

#### 活動

橘

誠

モンゴル人民共和国時代、一九二一年の「モンゴル革命」はあるシェーマに基づいて語られていた。それは、「反封建反帝国主義を掲げた『人民革命』を導いたのはモンゴル人民党である」というものである。民主化以降は「歴史の見直し」が行われ、「革命」は、その是非はともかく「民族民主革

命(Үндэсний ардчилсан хувьсгал)」と定義されるようになっていく。これは、モンゴル近現代史を「モンゴル民族」の「国民国家」建設過程として捉える傾向を示すものであり、現在のモンゴル国の存在が過去に投影されたものであるが、このように「革命」の成果が見直されているにもかかわらず、「革命を導いたのはモンゴル人民党である」というシェーマは依然として堅持されている。また「革命」が無条件に承認され、一九二一年に何が起り、それは何に起因し、その結果どうなったのかという根本的問題が無視されている。要するに「歴史の見直し」とは名ばかりで、「モンゴル革命史」の「翻案」が書き続けられている感があり、この「歴史の見直し」は批判的に検討されなければならない。

外モンゴルが中国からの実質的独立を果たした一九二一年、外モンゴルには一月足らずの間に二つの政府が相次いで再興・樹立され、約四ヶ月間並立していた。一方は二月二二日に再興したボグド・ハーンを戴